

二〇二〇年二月四日

通天閣警告の赤冬寒し
コロナなどどこ吹く風と日向猫
医療者へ感謝の聖樹青灯る
けたたまし諍い絶へぬ鴨の陣
雪吊の棟梁きりり脚絆締め
煌めきつ寄する細波池小春
風にゆれ鯉にゆれたる散紅葉

二〇二〇年二月三日

玻璃内に猫の見上ぐる冬の雲
ト口箱をはみ出す河豚の脹れ面
冬ざれや護岸工事の轍あと
点滅にポインセチアの浮かぶ窓
パン屑に巴争奪ゆりかもめ
落葉降る昼なほ暗き古墳かな

二〇二〇年二月二日

冬満月地球の影の仄かなり
老独りコロナ禍に耐ふ十二月
鯛焼きのはらわたの餡甘かりし
アンテナに物見してをる寒鴉
新婚の庭に一畝冬菜畑

二〇二〇年二月一日

内海を照らしわたりぬ冬満月
命綱腰に窓拭く師走かな
冬日和蒼天高く双耳峰

満天

もとこ

智恵子

やよい

凡士

やよい

明日香

こすもす

凡士

せいじ

豊実

ぼんこ

なつき

むべ

はく子

宏虎

こすもす

なつき

三刀

みきお

たか子

短日の赤信号の長きこと

古民家の剥げし土塀や石路の花

冬帽子取つて一礼磨崖仏

月冴えて一朵の雲も寄せつけず

色かさね紅葉且つ散る通天橋

神さぶや冬曙の三輪の山

二〇二〇年二月三〇日

笹原を揺らすは熊か木枯しか

おでん串増へて白熱する議論

街の景点描となる冬の霧

すきま風硫黄の匂ふ湯治宿

朝日出てダイヤ光りす霜の畑

湯豆腐の湯気のむかうに妻の顔

二〇二〇年二月二九日

峡の道落葉時雨となりにけり

小春日や病舎の夫へゆで卵

総身の葉捨てて大樹の冬支度

二〇二〇年二月二八日

裸木となりて華燭を身に纏ふ

あたたかし棺に千羽鶴溢れ

あたたかや寺に後継ぎ生まれしと

書きあぐねお礼は後や蜜柑食ぶ

満天

やよい

みきお

菜々

もとこ

明日香

豊実

素秀

凡士

たか子

明日香

三刀

せいじ

やよい

三刀

凡士

こすもす

はく子

むべ

毎日句会みのる選・二〇二〇年二月六日